

葛飾北斎が生きた小布施の風土と地域経済

市川 健夫

はしがき

江戸中期・後期には江戸を舞台に庶民文化が開花したが、その中で浮世絵芸術は独自の分野を開拓した。その絵画は国内のみでなく、オランダ船でヨーロッパに伝播され、フランスの印象派絵画の手法に大きな影響を与えた。また安政の開国（一八五四年）後はアメリカに浮世絵が大量に輸出された。そこでボストンの美術館には浮世絵の肉筆画が大量に所蔵されている。浮世絵の作家としては、美人画では鈴木春信・喜多川歌麿が名高い。また東洲斎写楽は歌舞伎俳優をよく描いた。さらに風景画では「富嶽三十六景」の作者葛飾北斎と「東海道五十三次」の作者歌川（安藤）広重が有名である。この中で北斎はその個性が一番強かつたので、現代に至るまでファンが多い。

葛飾北斎は宝暦十年（一七六〇）江戸の下町本所に生まれた。宝暦の大飢饉（一七五四～一七六六）の最中で、世情は極めて不安定であった。宝暦の飢饉が終つてから二〇年間は気候が比較的安定した温暖期を迎える。一方北斎は一六歳で木版彫刻を学び、二〇歳で役者絵や美人図などの専門画家になる。文化元年（一八〇四）～文政十三年（一八三〇）の二六年間は「化政」の頃といわれて気候が安定し、また町人文化が爛熟した時代であった。

小布施には豪商・豪農が多数いた。彼らは経済的な支援をするばかりか、天井画などの大作の製作に当たつては、北斎の画業を手助けしていた。何故小布施に豪農・豪商が生まれたかというと、風土に適した綿花と菜種という商品作物を江戸中期以降栽培していたからである。実綿（綿の纖維が種子についている状態をいう）→繰綿（綿実を取り去つたもの）→篠巻（綿の纖維を弓幹^{ゆがら}で叩いて紡錘に巻きつけたもの）→綿糸→綿布と、四回も加工してから商品化するため、穀物生産よりも付加価値が高く付いた。また菜種は搾油されて菜種油（種油）に精製された。天保八年（一八三七）小布施

の「油絞り」（搾油業者）が一九軒もあつたが、その油は燈油と食用油に用いられた。また菜種粕は綿作の肥料に使用されていた。

小布施が立地する松川扇状地右扇と千曲川沖積地（自然堤防・後背低地）は、後背低地の延徳田圃と雁田山麓を除くと、水利に恵まれていなかったために水田が少なく、普通畠地と栗林になっていた。したがつて平地林は松川添いの保安林（防水林）になつていて赤松林と、近世初期まで北流していた旧松川の河床跡のみであつた。松川扇状地の扇央部から扇頂部にかけて存在した平地林は、小布施村町組・福原村・松村などの新田開発とともに耕地化された。本論においては、稻作を中心とした耕種農業經營だけではなく、綿作や菜種栽培を中心とした商業的農業を営んでいた小布施の実態について明らかにしたい。

一 化政時代・天保時代の北斎

江戸中期の元禄時代から幕末・明治初期まで寒冷な小氷期が続いた。歴史時代になつて最も寒さが強かつた天明の大飢饉（一七八一～一七八八）に見舞われた。そこで日本の経済・文化はきびしい逆境のもとに置かれていた。天明の大飢饉が終つて、天保の大飢饉（一八三一～一八三九）が始まるまでの温暖期が二五年間も続く。文化元年（一八〇四）から文政十二年（一八二九）までの間を、化政時代というが、元禄時代とともに江戸の町民文化が最も爛熟した時代であつた。美術部門では元禄時代庶民の風俗を主題とした浮世絵が起つたが、化政時代になるとこの浮世絵が大きく流行した。それは極彩色の錦絵を版画で摺ることで、浮世絵の大量生産が可能になつたからである。これまでの浮世絵の主題は美人画であったが、化政の頃になると、風景画という新しい境地が開発されていった。

この風景画の代表作が北斎の「富嶽三十六景」で、天保二年（一八三二）

ごろ刊行されている。「富嶽三十六景」のうち「凱風快晴」は、俗称「赤富士」ともいわれ、北斎ならではの画風で描かれている。平成二十年度の郵政公社の年賀葉書の絵に「赤富士」が採用されている。

化政時代の北斎の年齢は、四五～七〇歳であり、北斎芸術が最高の域に達した時代であつた。「北斎漫画」や「富嶽三十六景」などはこの時期に描かれ、刊行されている。この化政時代は文政十二年（一八二九）で終るが、その時代思潮は幕末からさらに明治初めまで続くのである。

一九世紀初期（一八三一～一八三六）天保の大飢饉で、百万人といわれた江戸の市民の多くが飢えに悩まされた。このような社会不安の中でも、北斎の芸術活動は力強く続けられていた。

天保の大飢饉が終つたのは天保十年（一八三九）で、農産物も平年の作柄を回復してきた。天保十三年（一八四二）の秋、北斎は奥信濃の小布施の里を訪れた。その時北斎は八三歳の高齢であつたが、江戸から江戸川・利根川・烏川の舟運を利用して上州倉賀野宿に至つた。ここからは陸路中山道で高崎宿を経由して、中山道のバイパスである大坂街道（上州では仁礼街道）を旅して榛名山西麓の大戸宿・浅間山北麓の大坂宿を通つた。さらには鳥居峠を越えて信州に入り、菅平・仁礼宿・須坂を経て、小布施に至つたと思われる。また北上州の草津温泉と沓野・中野を結ぶ草津街道、北上州嬬恋村三原から灰野峠（現須坂市豊丘区）に至る三原道などは、地形が険阻なため乗用や駄載にはもっぱら牛を用いるいわゆる「牛道」であつた。第二次大戦後まで山田温泉～山田峠～万座温泉の道も牛道であった。大坂街道の駄載は馬であつたが、乗用には大きな箱鞍を牛の背に着け、体力のない女性や子供は牛の背を使つた。八三歳の高齢者であつた北斎を、高井鴻山の使用人が江戸まで出迎え、舟運と乗牛を用いて小布施まで同伴してきたに違ひない。

小布施に来た北斎は、高井郡第一の豪商といわれた高井鴻山宅に寄寓し